
【体験版】重役フロア42階 ～常務直々の特別査定～

—— STORY ——

妹の手術代1500万円と引き換えに、俺は査定対象になった――。

24勝3敗、K022。元東洋太平洋ライト級王者・榊（26）は、網膜剥離で1年前に引退。妹の白血病骨髓移植費用1500万円のため、大手商社「都千商事」の特別契約社員枠にサインした。違約金3000万。たかが事務職に違約金3000万。条件を読んだ瞬間、頭の隅でゴングが鳴った気がした。だが、佳代の主治医の電話のほうがずっと大きかった。

歓迎会の夜、22時のIDロック起動と同時に、常務取締役・御堂（38）の声色が「私」から「俺」に切り替わる。「動くな。妹の手術代、明日返せるか？」――左フック一発で済む距離。反応速度ボクサー級。だが、振り下ろせない。

業績査定35項目。タブレットに記録される反応速度・声量・射精量。万年筆で太ももに走る墨字。事務口調と敬語のまま、御堂は榊を「投資対効果」として運用していく。

※本書は体験版です。第1話・第2話のみ収録。

【 目 次 】

第1話 契約条項18条

第2話 業績日報・初日朝

1

第1話 契約条項18条

妹の手術代1500万円と引き換えに、俺は査定対象になった。

4月15日、夜21時45分。丸の内・都千商事ビル42階行きの役員専用エレベーター。俺は上着の内ポケットから紙ナプキンを取り出した。中身は冷えたコンビニのおにぎりだった。鮭。歓迎会の二次会の途中で内線が鳴って、これしか食う暇がなかった。

ボタンの「42」が光る。

佳代が入院前に都千商事の株主一覧を覚えていた。会社四季報を読むのが好きな子だった。「兄ちゃん、お兄ちゃんがそこに行くなら覚えとく」と、毛が抜けた頭で笑ったのだ。

俺の口角が一度だけ上がった。すぐ落ちた。

佳代の今夜の体温は37度2分。看護師から短いメールで届いていた。骨髄移植の前処置は順調。あと10日で本番だ。間に合わせるための1500万を、俺はもう動かしていた。今はどんな扱いを受けても、降りる選択肢がない。

かつての俺なら、今頃リングの上だった。

24勝3敗。K022。東洋太平洋ライト級王者。

網膜を傷めて1年前に引退した。それからは妹の治療費に追われ続けた。佳代の白血病。骨髄移植の保険適用外コスト1500万円。地方の中卒元ボクサーに、まともな金策などない。

だから、俺は二週間前に契約書にサインした。

大手商社・都千商事の「特別契約社員」枠。会社が一括で1500万を肩代わりし、月25万を給与から60か月かけて返す。違約金3000万。たかが事務職に違約金3000万。条件を読んだ瞬間、頭の隅でゴングが鳴った気がした。だが、佳代の主治医の電話のほうはずっと大きかった。

22時00分まで、あと15分。

社員IDロックが起動するまで、あと15分だった。

俺は冷えたおにぎりを口に押し込み、紙ナプキンを丸めた。役員専用フロアのカーペットを汚すな、と入社研修で釘を刺されている。

扉が開く。

42階。重役フロア。

常務室の前に男が立っていた。

「お疲れさまでした、榊さん」

穏やかな敬語だった。御堂常務。38歳。最年少昇進。社内では「数字の御堂」と呼ばれている男だ。資料で写真は見ていた。実物はもう一回り大きかった。186・85キロ・右利き・素人だが反応速度がボクサー級。俺の体が勝手に査定を済ませた。

「少々ご確認したい契約条項がございまして」

御堂は手にしたタブレットを軽く掲げた。

モンブランの万年筆を、上着の胸ポケットに差している。

常務室。皇居側ガラス張り。床から天井まで一面の夜景。執務机、応接ソファ、書類棚。机の上にタブレットスタンド。

画面に、契約書が表示されていた。

第18条。

「特別研修参加同意」

太字の見出し。下に細い文字で本文。

「業務時間外においても、業績向上を目的とした特別研修に同意する。研修内容は、人事評価担当役員の裁量による」

御堂は読み上げた。

声色は変わらない。事務報告の温度。

俺はその条項を読まずにサインしていた。

「は……？」

立ち上がりかけた。

その耳に、電子音が落ちた。

ピー。

短い、機械的な音だった。

壁の時計が22時を指していた。

社員IDのフロアロックが起動した音だ。

22時以降、このフロアに残れるのは役員IDを持つ常務だけだ。

俺の社員IDは、いま無効化された。

「動くな」

声色が変わっていた。

「私」が「俺」になっていた。

御堂が机の縁に腰を浅く預け、こちらを見ていた。

「妹の手術代、明日返せるか？」

拳に力が入った。

左フック一発で済む距離だった。

反応速度ボクサー級。だが、振り下ろせない。

佳代の手術代1500万。違約金3000万。合計4500万。鳴ったゴングは俺のためじゃない。佳代のためだった。

俺は首の関節を一度だけ鳴らした。

ぱきっ、と音がした。

「特別査定の初日です」

御堂が万年筆をくるりと回した。

御堂はタブレットを机に置いた。

代わりに、書類クリップ大の機械を取り出した。役員IDで22時以降のロックを上書きする端末だ。

ピッ、と音がして、ドアの内側のロックが落ちた。

もう、誰も入ってこない。

「シャツを脱げ」

短い命令だった。

俺の手はスーツの上着のボタンに行きかけて、止まった。

佳代の顔を思い出した。

左フックは永遠に握ったまま下ろした。

脱いだ。

御堂が万年筆を抜いた。モンブラン149。重役の象徴。先端のキャップを開け、ペン先で俺のシャツの第1ボタンに触れた。

「身長172.3センチ」

ボタンを上から弾く。

ぽつ、と外れた。

「体重69.4キロ」

第2ボタン。

「体脂肪率7.8パーセント」

第3ボタン。

「元東洋太平洋ライト級。優秀な検体ですね」

検体。

俺の口の端にちっ、と舌打ちが浮かんだ。

御堂の手は止まらなかった。第4、第5ボタンが落ち、シャツの前が割れた。

「ズボンも」

俺は脱いだ。

黒のボクサーパンツが最後だった。

御堂が万年筆の先で、パンツのウエストをかすった。

「項目8。下着は自分で脱げますか」

「……俺で抜けや」

舌打ち混じりだった。

御堂が一度、目を閉じて開いた。

タブレットに、何かが入力された。

「項目8、口頭抵抗を確認。0.5点減点」

俺は自分でパンツを下ろした。

陰茎が窓外の光に晒された。

御堂は視線も向けなかった。

タブレットを起動し、カメラを構えた。

ぴこん。

通知音。

「項目1から10、外形査定。入力します」

応接ソファに座らされた。革の冷たさが尻に走った。

胸囲、腹囲。両腕を上げる指示。胸郭の左右差を測る。前歯が自分の下唇を一瞬噛んだ。

陰茎長14.8センチ。

数値が丸の内の灯りを背景に並んでいった。

一つひとつ、御堂が読み上げる。

俺は座らされたまま、読み上げに合わせて姿勢を変えさせられた。ひざを開け。腕を上げろ。横を向け。事務口調で。

声を殺した。歯を食いしばった。

御堂の指が俺の腕を取り、検査用に持ち上げた。

コーナーで、グローブの紐を確認されるとき動きに似ていた。だが、あの距離で目を合わせる相手はいなかった。

御堂は合わせた。

査定する目だった。

「両手、頭の後ろで組んでください」

俺は組んだ。

脇の下まで、夜景の光に晒された。

御堂が俺の脇腹に、人差し指の腹をあてた。

肋骨の数を、確かめるように、指がすべる。

1本、2本、3本。

肋骨の本数を数えられるのはジムの計量検診以来だった。あのときは減量で骨が浮いていた。今は引退して肉が戻っている。

御堂の指は肋骨の本数より、その上の皮膚の温度に時間をかけた。

「項目10。皮膚反応。良好です」

「項目11。敏感部位確認」

御堂が万年筆を持ち替えた。

ペン先のキャップを閉じ、軸の腹で俺の耳の裏に触れた。

爪の腹のような、滑らかな曲面が耳たぶの裏側を這った。

びく。

俺の体の底のほうで、何かが跳ねた。

「触ん——」

言いかけた。

言い切る前に自分のものが立ち上がっていることに気づいた。

俺の自覚のない場所だった。

御堂が一度、目を閉じて開いた。

「項目11、敏感部位、一発で発見。データ上、稀少な反応です」

タブレットに、何かが入力された。

御堂がソファの足元にしゃがんだ。

俺のひざの間に、上から覆いかぶさるように。

万年筆をぐるりと回し、机に戻した。

代わりに唇が俺自身の先に触れた。

「次の項目に進みます」

事務口調のまま、口に含まれた。

「触んな……ってッ」

歯を食いしばった。

御堂の口の中は想像していたのと違って、熱かった。湿っていた。舌が亀頭の裏側を、ゆっくり這う。

ちゅぽ。じゅる。事務的な口調と裏腹に、口元から漏れる音が湿っていた。

俺の腰が自分の意思を裏切って浮いた。シャドーのフットワーク。違う。それは違う。逃げの動きだった。

御堂の舌先が尿道の口をつん、と突いた。

俺の口から、思っていたより高い声が出た。

歯で噛み殺した。

御堂は深さを変えた。

浅く、もう一度浅く、それから、奥まで。

ぐぽ、と音がした。

御堂の喉の奥が亀頭を絞った。

俺の脚の、ふくらはぎが勝手にかたくなった。

御堂の手が俺の腿の内側に当たった。

逃げるな、という意味の、軽い圧だった。

ボクサーのコーナーで、セコンドが選手の肩を抑えてリングに送り出すときのあの圧の入れ方に近かった。

御堂はそれで俺の体を制御していた。

「項目11の追加、口腔内反応。良好です」

御堂が俺自身を口から外した。

糸を引いた唾液が夜景の光を映してきらりと光った。

寒い街明かりと、自分の体の中で立ち上がる熱が釣り合わなかった。

「俺の許可なく萎えるな」

短い命令だった。

御堂は再び口に含んだ。

今度は深く。喉の奥まで。

ぐぽ、ぐぷ。

頭の根元を絞られる感覚が立て続けに来た。

俺の体が意図せずビクついた。

手のやり場がなかった。応接ソファの革を爪が立てて、引っかいた。

限界が思っていたより早く来た。

全身がぎゅっ、と内側に引き絞られた。骨盤底筋が引き上がる感覚。何度も経験した踏ん張りの感覚に近い。だが、向きが逆だった。

歯を食いしばった。

「出ます……っ」

俺が言った直後、御堂は口を離した。

俺自身を、根元で握った。

寸前で、止められた。

「項目12。射精のタイミングはこちらの裁量です」

俺の根元を握った指の力はボクサーグローブの締めの方に近かった。

逃げ道を、すべて潰されている。

俺は応接ソファに押し倒された。

四つん這いの姿勢を作られた。

御堂が上着を脱いだ。万年筆を胸ポケットに差し直した。

タブレットはサイドテーブルの上で、動画録画を続けていた。

「契約条項に基づきます。痛みは記録対象外」

潤滑剤の冷たさが後ろに走った。

ボトルからぬる、と垂れる。それがひだの上で温度を上げていく。

御堂の指が一本、入った。

太かった。骨ばっていた。万年筆を握る指。書類にサインを書く指。それが俺の中にいる。

2本目。3本目。

御堂の指は急がない。

奥に進むのではなく、内壁を測るような動きだった。

「内径、入口から5センチで1.8センチ。10センチで2.2センチ。記録します」

俺の体は自分でも知らない場所を押された。

ぐ、と腹の側を持ち上げるような圧。

声が漏れた。

「項目13。前立腺位置、標準より浅め。記録します」

ぴこん。

タブレットの通知音だった。

御堂が自分のスラックスのベルトを外した。

金属のバックルが応接室の絨毯の上に落ちた。

ことり、と。

俺は後ろを振り向けなかった。

挿入は思っていたより、ゆっくりだった。

御堂は急がなかった。

亀頭の先が俺の入口を押した。

体重を乗せる、踏み込みの圧があった。

ぎ、と俺の体が押し開かれていく。

奥まで進めて止めて、戻して、また進める。

査定は続いていた。

「項目14。直腸壁収縮、標準値の1.4倍。優秀」

俺の口から、声が漏れた。

腰が思わず揺れた。

24勝3敗の体が知らない場所で堕ちていた。

御堂が動きを早めた。

ベッドではなく、応接ソファの背もたれに俺の手をつかせ、後ろから腰を打ちつける。

肌のぶつかる音がガラスの向こうの闇に響いた。

ぱん、ぱん、ぱん。

御堂の呼吸は依然として乱れない。

御堂の声色は変わらない。

俺の汗が革の背もたれに落ちた。応接ソファの曲線を、汗の筋がつたって、下に流れた。

奥のほうの、自覚していなかった一点を、御堂の雄の先が何度も叩いた。

俺の口から声が勝手に出た。

ボクシングの判定で、最後の10秒のゴングを聞いたときの、絞り出される息に似ていた。

だが、これは、勝ったわけじゃない。

御堂は俺の腰を抱え直した。

角度が変わった。

今度は深いほうの一点を、上から押す形になった。

俺自身の先から、透明な液が糸を引いて、応接ソファの革の上に落ちた。

ぼたり、ぼたり。

俺は出していないのに、出していた。

御堂が俺のうなじに初めて、唇を寄せた。

息が当たった。

査定者は感情を出さない。それで、も、息は熱かった。

俺の体の首の後ろが勝手にすくんだ。

御堂は何も言わなかった。

ただ、抜き差しの速度をもう一段、上げた。

「項目14の追加、嬌声採取。サンプル良好」

ぴこん。

「内部に記録物質を残します。査定の証拠です」

御堂の動きが深くなった。

最後の一突きで、奥に温かいものが広がった。

ぴゅるっ、と。脈打ちながら、長く。

俺の腹の中が他人の体液で埋まった。

2度、3度、御堂の熱が俺の中で脈を打った。

4度目で、御堂は動きを止めた。

「項目15。射精完了」

御堂が抜いた。

ずる、と。

ぬるい液が俺の太ももの内側をつ、と流れた。

ひざ立ちの俺の前で、御堂はティッシュを取った。

自身を拭い、スラックスの前を整えた。

1分前まで俺の中にあったものは、もう白いシャツの下に隠された。

「自分で出してください。項目16の自己採点です」

俺は自分の手で、自分自身を握った。

歯を食いしばった。

数回、しごいた。シュコ、シュコ。

寸止めの寸前まで来ていた俺の体はすぐに反応した。

もう一度。あと数回。

自分の指で、自分の限界を作った。

応接ソファのレザーに、白濁が飛んだ。

量はたぶん多かった。一週間ぶりだった。

ぴゅく、ぴゅくっ、と、2度に分けて出た。

「項目16。自己解決能力、合格」

御堂が機械的な手つきで、ティッシュを俺に渡してきた。

俺は自分で拭いた。

革の上の白濁を自分の手で、自分の精液を。

御堂が机に戻った。

タブレットに、最後の入力を済ませた。

万年筆を抜いた。

俺の太ももに、墨字を走らせた。

初回研修完了 4/15 23:42

冷たいインクが皮膚に残った。

御堂の指は、書き終わった後も、一秒ほど、俺の太ももに置かれていた。

「査定に反映します。お疲れさまでした」

御堂は上着を整えた。

俺の社員IDを返してくれた。

22時前のただの新入社員に戻った扱いだった。

「役員専用シャワー室、ご利用ください。タオルはございます」

俺はふらつきながら、シャワー室に入った。

全自動の照明がまばゆく光った。

大理石の鏡。

お湯の温度は御堂の体内温度と、ほとんど同じだった。

肌の上を流れていく湯が流したつもりのものを流してくれない。

太ももの墨字は湯では薄まらないインクだった。

御堂は、最初から、その種類のインクを用意していた、ということになる。

鏡の中の俺の太ももに、御堂の万年筆の墨字がまだ乾いていなかった。

左フックは握ったまま下ろされていた。

拳の握りが24勝3敗の体重を支えていたあの頃と、同じ形だった。

だが、振り下ろせない。

今頃、新人歓迎会の二次会組は終電に揺られている。明日の月曜の憂鬱。新人の名刺交換。普通のサラリーマンの人生。

だが、その平凡な憂鬱は42階のシャワー室には、届かない。

俺は初めて、全身が震えるのを感じた。

寒さじゃなかった。

2

第2話 業績日報・初日朝

月曜の朝、俺の太ももの墨字はシャワーでは落ちなかった。

4月16日、朝7時。アパートのユニットバスで、湯を強くしても無駄だった。墨字は最初からインクの種類を選ばれていた。御堂がそういうインクで書いていた。

俺はワイシャツを、いつもより1枚厚いものに替えた。

パンツの下に振動具がひとつ入っていた。

昨夜、シャワー上がりに「明朝、出社前に装着の上、ご出社願います」と内線で命令が来た。指示書付きの宅配袋が玄関のドアノブにかかっていた。

拒否権は契約書のどこにも書かれていない。

佳代に、メッセージを送った。「今日は新人研修。電話は夕方」と。

返信「いってらっしゃい」

顔文字。骨髄移植まで、あと9日。

俺の口角が一度だけ上がった。

かつての俺なら、月曜の朝はジムだった。

午前6時起床。ロードワーク10キロ。サンドバッグ100発。

今は振動具を装着して通勤電車で揺られている。

地下鉄丸の内線。

振動具はまだ動いていない。

だが、ある、というだけで、座席に座るたびに、俺は浅く息を吸わなければならなかった。

都千商事ビル14階。一般社員フロア。

俺の席は入口から3列目、窓側。名刺ホルダー、タブレット、社員手帳。新入社員の標準セットがそろっている。

「おはよう、榊くん」

直属上司の相浦だった。30歳。人事部、入社8年目。

無邪気に、笑っている男だった。

「いやー、特別契約社員はいいよなあ。給与体系違うんでしょ？ 羨ましいよ」

月25万の返済が相浦には見えていない。1500万の借金も、3000万の違約金も、見えていない。

42階のことも、もちろん見えていない。

「……お疲れさまです」

俺は短く返した。

振動具はまだ動いていない。

午前10時。タブレットに通知が落ちた。

びこん。

「業績日報フォーマット送付。業績項目35個。提出期限、本日17時」

差出人、常務取締役・御堂。

俺は項目を上から読んだ。

1から34まではありふれた営業日報の文言だった。アポイント数、商談数、社内連絡件数、議事録の記入時間。

項目35。

「夜間業績研修・自己採点欄」

空欄がぽつんと一つ。

俺はその空欄を、長く見つめた。

昨夜、俺の項目16の自己採点は御堂が合格と入力したはずだった。

だが、俺自身が記入する欄は、別にあった。

俺の手が自分で、自分を採点する欄。

24勝3敗のボクサーが自分の負けを毎晩自己採点する書式は世の中に存在しない。

だが、今の俺の業務はそれを毎晩書く仕事だった。

午後2時、5分前。

俺は役員専用エレベーターの前にいた。

御堂と、若手の課長と、商社の取引先プレゼンに同行する。新人にも見学の機会を与える、という名目だった。

扉が開く。

御堂と、課長が乗った。

俺も乗った。

扉が閉まった瞬間、御堂の手が俺の腰に当たった。

外側からはエチケットの誘導に見えた。

手のひらが、ベルトの上、シャツの裾の内側に、深く入った。

ベルトの留め具のすぐ下。振動具のスイッチの位置。

「項目12、装着確認」

誰にも聞こえない声量で、御堂が言った。

課長は書類を見ていた。

ぶ、と。

俺の腰の奥で、低い振動が始まった。

強度1。

まだ耐えられる。

扉が3階で開いた。プレゼン会場の応接フロア。

俺はふらつかずに歩いた。靴底の踏みしめ方を、3年ぶりに意識した。減量試合の最終ラウンド前と同じ、足底の力点の管理だった。

商談室。長机、革張りの椅子。取引先5名課長、御堂、そして俺。

課長がプレゼン資料を開いた。

俺はペットボトルの水を配る役だった。

立ち上がって、机の周りを一周する。

その間に、振動具の強度が2に上がった。

御堂の人差し指が上着のポケットの中で、動いた。

俺の太ももの内側に汗がつ、と一筋落ちた。

昨日の墨字の上を、汗が流れた。

23:42、と書かれた数字の0が、汗で少しにじんだ。

「ライト級の最終ラウンド、ジャブの数を絞る」

俺はそう自分に言い聞かせた。声を、平らに保つ。

水を配り終え、席に座る。座面の革が振動具の伝導を強める。

強度3。

俺の指先がペットボトルのキャップの上で、軽く震えた。

御堂は課長の隣で、表情を変えない。タブレットに、何かを入力している。

査定項目の入力か、議事メモか、判別はつかない。

プレゼンは40分続いた。

俺はひと言も発しなかった。

強度4。

俺の前立腺の手前を、振動の中心が押し続ける。

骨盤底筋を、握ったままにできる時間が刻一刻と短くなっていく。

歯を、奥歯で噛み合わせる。前歯ではない。前歯で噛むと、外から見える。

奥歯で噛むのがリング上で痛みを殺すときの定石だった。

強度5。

俺の指先がペットボトルのキャップの上で、2度震えた。

御堂は課長の隣で、会議メモを取っている。タブレットの画面では、議事録の枠線と、別タブで開かれた「査定項目12」の欄が、両方並んでいるはずだった。

俺の体はその両方の入力欄に、同時に書き込まれている。

ひと言、ちっ、と舌打ちが出かかった。

その瞬間、強度が6に上がった。

舌打ちは口の中で、消えた。

御堂は舌打ちが出ないところまで強度を上げる、ということだった。

「項目12の追加採点。音量制御、合格」

プレゼンが終わった。

取引先と課長は隣の応接室で、続きの会食。

俺と御堂は3畳ほどの控室に通された。

ドア一枚向こうは廊下。秘書が行き来している。

御堂が、ドアの内側のロックをピッ、と落とした。

「項目18。エロ採取。本日は妄想射精から」

「は……？」

「目を閉じて、想像だけで出してください。器具の使用は認めません」

矛盾命令だった。

俺の腰にはまだ振動具が入っている。強度4で、動いている。

俺は目を閉じた。

閉じた瞬間、強度が5に上がった。

振動の周期が俺の体内で、短く速くなった。

「想像、と言いました」

御堂の声は平らだった。

だが、リモコンの強度は6に上がった。

目を閉じた俺の中に何の映像も浮かばなかった。

元婚約者の顔も、ジムのトレーナーの背中も、佳代の顔も、何も。

脳の中身が白く焼ききれていた。

そこにあるのは、振動具のパルスと、御堂の声と、エレベーターのボタンの「42」の光だけだった。

強度7。

俺の腰が控室の革張り椅子の上で、勝手に浮いた。

骨盤底筋が限界まで引き絞られていた。

ボクシングの試合で、K0直前にロープに背中を預けるときの足の力の抜け方に近かった。

俺は抗わなかった。

応接控室の革張り椅子の上でびゅく、と。

スラックスの中の白濁が布を、内側から濡らした。

俺は何も想像していなかった。

「項目18、規定違反。器具による達成は項目逸脱です」

タブレットに、入力された。

ぴこん。

「机の下へ」

御堂が控室の応接机の前の椅子に座った。

俺は机の下に潜らされた。

革靴の先が俺の太もものに触れた。

革の冷たさ。

「常務のスラックスの前、自分で開けてください」

俺は御堂のスラックスのジッパーを、口だけで開けた。

歯を立てないように、舌で滑らせて、ジッパーの引き手を、下に下ろした。

じり、じり、と金属の歯が一つずつ落ちる音。

俺の唇から息が漏れた。

ジッパーの中から御堂の体温がふっと上がった。

ボクサーパンツの黒い布越しに、軸の太さがはっきり伝わってきた。

昨夜、俺の中にあった形と、同じ形だった。

俺の体が、その形を、もう覚えている事实に、舌打ちをしたかった。

だが、舌打ちの音は机の下では、御堂の太ももの間に閉じ込められる。

「項目19。勃起を誰かに気づかれたら、減点です」

ドアの向こうで、秘書のヒールの音がした。

通り過ぎていく音。

俺の心拍が上がった。

御堂の雄はもう立ち上がっていた。

ボクサーパンツの中から太い軸が半分顔を出している。

俺は口で、引き出した。

布の縁が俺の唇の上をつ、と滑った。

御堂の体温が口の中に直接届いた。

昨夜は御堂が俺のものを口に含んだ。今日は俺が御堂のものを口に含む側にいる。

立場の上下は変わっていない。

ただ、配置が変わっただけだった。

御堂は机の上で、書類のページをめくった。

平静そのものだった。

俺の口の中だけが戦場だった。

舌で、亀頭の裏を這わせる。

歯を立てない。声を出さない。

ふくらみが俺の口の中でもう一段、太くなった。

御堂の手が書類のページをまた一枚めくった。

強度7。

俺の腰の中の振動具がもう一段、ペースを上げた。

俺の口の動きと、振動具のリズムが一致しなくなった。

ばらばらに動く二つの仕事を、同時にやらされていた。

舌は亀頭の裏。腰は振動具に抗う形。

24勝3敗の体は今、二箇所別々に査定されている。

御堂のものから、薄い透明な液が俺の舌の上に落ちた。

塩気と、舌の奥に残る苦み。

俺はそれを、舌ですくった。

吐き出したかった。だが、吐き出せば、控室のカーペットに音が落ちる。

ヒールの音がまた廊下を通り過ぎた。

俺は飲み込んだ。1回目。

御堂自身は俺の舌の動きにびく、と一度反応した。

俺は、それを、自分の達成として、口の端に意識した。

24勝3敗のボクサーが机の下で、別の競技の点数を稼いでいた。

御堂が一度、目を閉じて開いた。

「項目19の途中採点、口腔技術、初日には良好」

平らな声だった。

ドアの向こうで、秘書の声がした。

「常務、次のお時間です」

俺の体が机の下で、固まった。

御堂はペースを変えなかった。

「あと3分で出ます」

ペンの音が机の上でこつ、と鳴った。

俺の口の中の御堂がもう一段、深くなった。

俺の喉の奥に亀頭の先が当たった。

ぐ、と押し込まれる感覚。

涙が勝手に出た。

声は出さなかった。

歯も、当てなかった。

御堂が俺のうなじの後ろに、手を置いた。

逃げるな、の圧。

ヘッドギア越しにスパーリング相手のリードハンドが額をかすめる、あの近距離の制圧感に近かった。

俺は押された。

ぐぽ、ぐぷ。

控室のカーペットに、俺の唾液が糸を引いて落ちた。

御堂の腰が一度、深く沈んだ。

俺の口の奥に温かいものが広がった。

びゅるっ、と。

2度、3度、口の中で脈を打った。

「飲み込め。査定項目13、嚥下適性」

俺は飲み込んだ。

歯を食いしばって、喉を上下させた。

苦かった。塩気が舌の奥に残った。

「項目13、合格」

御堂が俺を机の下から引きずり出した。

控室の応接机の上に俺は四つん這いにされた。

スラックスを、御堂の手で下ろされた。

黒のボクサーパンツも、続けて。

昨夜の墨字が、また夜景ではなく蛍光灯の下にさらされた。

「先ほどの項目逸脱の補填です」

御堂の指が俺の腰の中の振動具を、ずるりと抜いた。

空白の収縮が内壁に走る。

ボトルの潤滑剤の冷たさが後ろに走った。

昨夜と、同じ位置。

御堂の指はもう内壁の地図を握っていた。

2本目の指が迷いなく、前立腺の浅めの位置を押した。

俺の口から、声が出かかった。

歯で、自分の腕を噛んで、殺した。

ドアの向こうで、ヒールの音がまた通り過ぎた。

俺の声は革靴の音に消されていく。

挿入された。

昨夜より、速かった。

御堂は急がなかったが迷わなかった。

奥まで、一息で進んだ。

俺の体はすでに、御堂の形を覚えていた。

24勝3敗の体が24時間で、新しい記憶を上書きされていた。

ぱん、ぱん、ぱん。

肌のぶつかる音が控室の壁に反射した。

外には聞こえない。

俺の汗が応接機の天板にぽたり、ぽたりと落ちた。

商談用の書類入れが汗で、隅から濡れていく。

御堂の手が俺の腰骨を、両側からつかんだ。

角度が変わった。

奥の自覚していなかった一点が御堂の雄の先で、また叩かれた。

俺の口から、声が出かかった。

慌てて、もう一度、自分の腕に、歯を立てた。

歯型が二重になった。

1本目はフェラの最中につけた。2本目は今つけた。

俺の前のものは誰にも触れていないのに、立ち上がっていた。

昨夜、自分の手で達したばかりの体がもう次の限界に向かって走っている。

奥が押されるたびに、俺自身の先から、透明な液が糸を引いて、机の天板に落ちた。

ぼたり。

商談用の書類入れの隅、汗の染みの上に別の染みが重なった。

「項目14。直腸壁収縮、本日は標準値の1.6倍。昨夜より優秀」

昨夜は1.4倍だった。

24時間で0.2倍ぶん、俺の体は形を覚えた。

ドアの向こうで、再び秘書の声がした。

「常務、お時間が」

「あと1分で出ます」

御堂が突き出しのペースを上げた。

俺は机の天板に額を押しつけ、奥歯で耐えた。

爪が自分の手の甲に、深く食い込んだ。

声を、殺した。

声を殺すという業務が俺の新しい仕事だった。

限界が来た。

俺自身から机の下に白濁が落ちた。

誰にも触られていない。

誰にも握られていない。

自分で出した、わけでもなかった。

御堂の熱が奥の一点を叩き続けたから、出た。

絶頂に、自分の意思がなかった。

ぴゅく、ぴゅくっ、と2度。

応接机の下、商談用の書類入れの上に白濁が落ちた。

明日の朝、誰かがその書類入れを取り出すはずだった。

俺の精液は書類入れの皮の繊維の中に染み込んでいた。

乾いた頃にはただの古い染みになる。

誰にも、何が起きたかはわからなくなる。

「項目18の補填、達成」

御堂の腰のリズムがもう一段、深くなった。

俺の腹の奥に御堂のものの形がこれまでで一番太く感じられた。

逃げ道は両側を腰骨で固定された四つん這いの中になかった。

御堂が最後の一突きを深くした。

俺の腹の中に2度目の温かいものが広がった。

昨夜より、量があるように感じた。

奥で2度、3度、御堂自身が脈を打った。

俺の体はその脈を、内側から数えていた。

4度目で、御堂は止まった。

御堂が抜いた。

ずる、と、ぬるい液が俺の太ももの内側を流れた。

昨日の墨字を、今日の御堂の体液が流していた。

御堂がティッシュを取った。

俺の太ももを、ゆっくりと拭いた。

昨夜の「初回研修完了 4/15 23:42」の数字を、ティッシュが丁寧に拭き取っていく。

まず、4の下棒。次に、コロン。次に、年月日の桁。

御堂は消す順番にも、優先順位を持っていた。

24時間しか、もたない記録だった。

毎日、上書きされる。

昨日の俺はティッシュ1枚で消える。

拭き終わった肌に御堂がまた万年筆を走らせた。

第2回研修完了 4/16 14:53

冷たいインクが皮膚に残った。

御堂の指は、書き終わった後、また一秒、俺の太もものに置かれていた。

「日報、お願いします。項目35の自己採点欄、お忘れなく」

御堂は上着のシワを正した。

ドアのロックを解除し、控室を出ていった。

廊下から「お待たせいたしました」と、何事もない敬語が聞こえた。

俺は机の天板に額をつけたまま、しばらく動けなかった。

商談用の書類入れの隅が俺の汗で、まだ濡れていた。

今頃、14階のオフィスでは相浦が定時帰りの準備をしているはずだった。「月曜から忙しかったね、お疲れ」と、俺の席に声をかけて、自分はビールを飲みに行く。普通のサラリーマンの月曜の終わり方。

だが、その普通の疲労は3階の応接控室には届かない。

俺は自分の太ももの数字を見た。

昨日の23:42は、もう拭われて消えた。

今日の14:53が、新しく上書きされていた。

数字は増えていく。

数字を、自己採点する欄を俺は今日、自分の手で記入することになる。